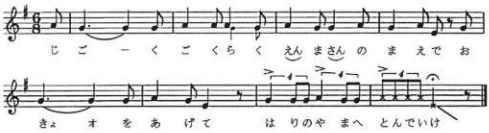
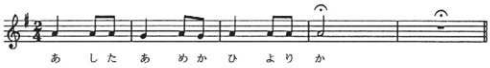
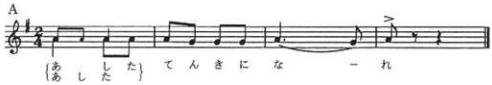
地獄極楽



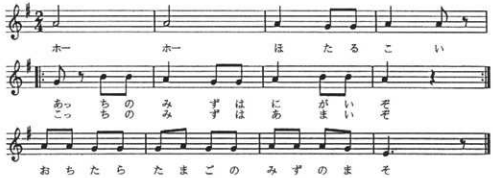
あした雨か



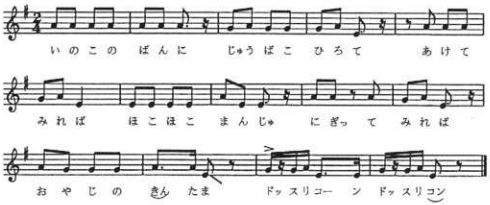
あした天気に



ホーホーほたる来い



亥の子の晩に


いのこの ばんに じゅうばこ ひろて あけて
みれば ほこほこ まんじゅ にぎって みれば
おやじの きん たま ドッスリコー ン ドッスリコン

安威地区　阿為神社　春の例祭

3．まつりのはじめ（遷座神事）

1．阿為神社

4．渡御帰還後（神輿と太鼓の交歓）

2．ダンジリ蔵と「書さだし」

安威地区
阿為神社
春の例祭

7．神輿の渡御

5．大念寺への挨拶

8．渡御に加わる猿太彦

6．阿為神社と大念寺の関係

報告書抄録

ふりがな	あいがわそうごうかいはつじぎょうにともなうぶんかざいとうそうごうちょうさちゅうかんほうこくしょ
書名	安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書
副書名	安威川ダム建設関係地域の自然・歴史・文化
シリーズ名	（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第9集
編著者名	大阪府安威川ダム建設事務所・田代克己・高橋　学・那須孝悌・井本仲廣・西川喜朗・林野全孝・大場　修・青山賢信・吉原忠雄・松尾　寿・藤澤典彦・上井久義・宇津木秀甫・楠　利夫・小原正顕・橋田俊彦・福留照尚・福山　昭　（編集：井藤暁子）
編集機関	（財）大阪府文化財調査研究センター
所在地	〒536　大阪府大阪市城東区蒲生２丁目11番３号　小森ビル４階
発行年月日	1997年３月31日

ふりがな 調査対象地	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査原因
くるまづくり 車作 おおいわ 大岩 しょうず 生保 くわばら 桑原	おおさかふ 大阪府 いばらきし 茨木市 車作 大岩 生保 桑原	27211		34度 52分 17秒	135度 33分 48秒	199101～ 199703	安威川総合開発事業に伴う調査

特記事項	大阪府が建設する安威川ダムによって影響を受ける流域地域のうち、山間部６地区の自然・歴史・文化を記録する総合調査報告書。考古・地理・地質・生物・建造物・歴史・美術工芸品・石造物・民俗・芸能の10部門にわたって平成２年度から調査を重ねた成果。 地理・地質・生物の自然関係については一応の成果をとりまとめることができたが、その他については４地区調査にとどまった。

財大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第９集

安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書

平成９（1997）年３月31日発行

編集・発行　財団法人 大阪府文化財調査研究センター
〒536 大阪市城東区蒲生２丁目11番３号
小森ビル４階
TEL06－934－6651 FAX06－934－7029

印　　刷　中島弘文堂印刷所

渡御は、錦の大幟り、真鍮の御幣、二人の神官、ついで巫女、大刀もちの少年と並んで、次に「フトン太鼓」、そして猿太彦、それから神輿、氏子役員の順で行列をつくる。

「フトン太鼓」の少年たちの掛け声は「セー」としか聞こえない。老人の説明では「トモセー」というのだそうである。「（神輿の）供（を）せえ」という意味だという。これは地元安威での考えで、十日市では「飛ばせ」であると言っている。

神輿の掛け声は「ワッショ」。

無事に石段をおりた行列は気迫が一致して道中行列をきびきびした掛け声と太鼓とで進む。新緑の好季が生命感を充満させる。

大念寺前の道を南へ、狭い道なので輿をかつぐ若中が溝にはまりこまぬように真新しい板で溝に踏板を並べてある。

戦前はひいたというダンジリが、ダンジリ蔵の戸を開けてかざられている。蔵の板戸に金一封のお供えの氏子の氏名が書きだされている。（安威では氏子中が祭礼経費を負担するため神社境内にはこの種の献金者名簿の「書きだし」がおこなわれない。ダンジリ蔵の「書きだし」は若中の経費にあてられる。若中へのこの財政援助があったからこそ、往年のダンジリがもりあがったのであろう。）

太鼓が聞こえてくると家で宴会をしていた氏子や親類が外にでて迎える。「昔は7日と8日のまつり。みんな勤めにでているので、十年ほど以前に5日の休日に変更した」由である。

それにしても5月5日の連休にこれほど熱中したまつりをおこなうと、とても家族旅行などはしていられない。その不満が若中にもあった。

お旅所までダンジリ4台をならべた以前の行列はみごとなものだったという。お旅所のまえにくると、4台のダンジリをならべて、板をのせて仮設舞台をつくって、そこで若中が「にわか」を演じていたという。「そのダンジリもあの石段をのぼりくだりしたんです」と老人はまだ往時を記憶している。行列は西国街道に出て、その南まで出て、Uターンする。旧道を進んだ名残りである。そこから耳原のお旅所までの西国街道の行列は気合いがはいる。耳原の氏子が街道に出て迎えるからで、お旅所の玉垣に入ると「フトン太鼓」と神輿がもみあう。神輿を頭上にさしあげたり、地面すれすれに腕で吊りさげながらもんだり、浴衣をきた指揮者の命令で何度もくりかえされる。神輿がおろされると三拍子のかしわ手で行事がおわる。

神輿が鎮座しているあいだ、しめなわをはって四本の竹で輿を蔽う。耳原氏子のお供えが三宝に盛って供えられ、オハライ、ノリト、カグラがあって休憩になる。

還御は午後1時15分出発。また儀式があって行列が出発する。帰りの行列は、氏子たちがごちそうを食べおわって、酒気をおびてごきげんで庭先きにたって見送る。輿をかつぐ若中、太鼓をかつぐ若中と、もどってきた出身者が「よお」「よお」と挨拶をかわす。太鼓の少年たちは「セー」と声をあげつづける。悠久の時間がながれる。西垣内で休憩。輿をおろすまえには道路に山からとってきた赤土が撒きちらされ、その神聖な土の上に台をおいて輿がおろされる。道路のど真ん中で、垣内からの供えものがならべられノリト、カグラが奏せられ巫女が舞う。天王の辻でも同様のことがおこなわれる。「むかしは、このあたりからダンジリがいったりきたり、もみあいました」という。

ハイライトは東の鳥居までもどってきて、「あいさつ」と称して輿が大念寺の山門まで石段をかけあがるときである。氏子がこれを見物しようと出てきて待ちかまえる。寺の参道の石段にはイノチヅナが張られる。

「フトン太鼓」は東の鳥居の下で「セー」と澄んだ声をあげつづけ、三打をくりかえす。

「ゆくぞぉ！」大団扇が振られると声をころすように「わっしょ」と掛け声をかけながら、じわじわと輿が石段をのぼる。山門のまえは、石段の勾配がつづく。「さあ、いいかっ、セーノ」「オーッ」と関の声をあげて狭い石段の途中で若中は輿を頭上にさしあげる。氏子たちが歓声をあげる。そのまま数段のぼる。先頭が山門にさしかかると先頭のほうは肩にかつぐ、うしろは頭上にさしあげる。それが藤原鎌足が建立したという寺への挨拶。「ゴーン」寺の鐘が鳴る。挨拶をうけた寺の返礼である。

石段のくだりがきびしい。イノチヅナのまわりに役員がはりつく。「フトン太鼓」の「セー」の声と三打の連続が緊張を持続させるようだ。

輿が道路におりきると「ゴーン」とまた寺の鐘がならされる。少年たちの「セー」の声と「わっしょ」の掛け声と寺の鐘とは、じつに巧妙な野外劇的な演奏といえる。勇壮感がみなぎる。（神輿の底には石か鉄のおもしが入っていると伝えられている。）

拝殿前に還御すると、出立ちと同じような儀式がおこなわれ、最後に境内せましと神輿がねりまわり「フトン太鼓」がはやす。式が終わると「フトン太鼓」は輿の若中の拍手におくられて、「セー」を繰り返し三打をつづけつつ、石段をおりて帰っていく。

拝殿でおこなわれる神楽は、村人がおこなうことはなく、かなり以前から寝屋川の楽人組がきて、太鼓と横笛だけで演奏し、その曲は府下の各地のものと変わりがない。

巫女の舞もまた楽人がつれてくるもので、ほとんど舞というに値しない。

「ダンジリ」は蔵の戸をあけて、供えものをするだけになっているが、これを復興させればお旅所への渡御はにぎやかなものに復元できる。「ダンジリ太鼓」は今回は聞くことができなかったが、復元のてだてはあるだろう。

輿が境内にもどった夜、若中によって提灯を境内にならべて、火入れを係りがおこなったころ、ダンジリ蔵に集まった若中がそろってゾロゾロと宮入りをする。以前は、「宮入りの音頭」を歌ったという。数年前まで提灯をもって、「宮入りの音頭」をうたったという老人が歌ったものは、部分的に歌えるだけであったが、それは「熊野節」ないし「伊勢音頭道中歌」といわれる国民歌謡ともいうべきものであった。

参考のために、調査者が三島地域で採集した「宮入り道中音頭」の歌詞を記しておく。

なお、「だんじり太鼓」「宮入道中音頭」などの継承発展は、氏子総代に相談するしかない。

第2項　大岩太鼓

大岩の峯　義昭氏が保存会の会長になっている。昭和60年に百年ぶりに「太鼓巡行」を復元したと称し昭和62年に大岩太鼓保存会を結成し、茨木市と連携をとって茨木市が紹介する博覧会などに出演している。

とくに「くずし太鼓」は、会長個人が祖父から伝授をうけたものであるが、「くずし」はいまだ完全復元とはいえず、気迫に乏しい。個人的努力によるもので、地域全体を含めての復元の努力が望まれている。雨乞い太鼓の系列と思われ、豊年を祈る巡行で、北摂の各地に残っているものよりも断片的で盛り上がりに欠ける。今後なおしばらく復元の努力が必要であるが、会長の熱意は高い。未定形として譜面保存の段階とはいえないが。

〔宮入り道中音頭〕

ヨーイヤセ　コーラセ
サーヨイサアー　　お伊勢　ななたびよ　　ヨヤセ　コラセ
熊野へ三度　　アーヨーイヤセ　コーラセ
アタゴさん（または　お多賀さん）へは　ノーヤレ　月まいり
　トコセー　ヨーイヤナ　アレワイセ　コレワイセ　ソラヨーイトセ

（以下　はやしことば省略）
・わらじや　笠の　ひもをばしめて　山のあなたへ　伊勢まいり
・おかげありゃこそ　世間の人は　欲をはなれて　施行するよ
・どこのどなたさんも　今夜はごくろ　ごくろついでに　またたのむ
・箱根八里は　馬でもこすが　越すに越されぬ　大井川
・ここの座敷は　めでたい座敷　鶴と亀とが　舞あそぶ
・おれとおまえは　卵の仲よ　　おれが白身で　きみを抱く
・米のたかいのに　ふたごをうんで　お米　お高と名をつけた
・色がくろおて　貰いてがなけりゃ　山のからすは　後家ばかり
・うちのかあちゃん　洗濯すきで　夜の夜中に　棹さがす
・喧嘩したとき　この子をみやれ　仲のよいとき　できた子じゃ
・嫁をとるなら　豆腐屋のむすめ　色がしろうて　味がよい
・八幡山から　谷底みれば　瓜やなすびの　花ざかり
・娘十七八や　市電の車掌　はやくおのりよ　チンチン電車
・おれとおまえは　羽織の紐よ　固くむすんで　胸にある

第２節　「歌謡」関係

第１項　盆おどり

各地区の公民館行事などで盆踊りが催されることがあるが、市販の録音テープで民踊会などがいくつもの種類の歌を踊ってリードするのが多い。

また、江州音頭の音頭とりがきて、江州音頭を踊ることがある。

地域でやや独自なものは「浄瑠璃音頭」で、これは今も義太夫・浄瑠璃がさかんな能勢地方からはじまって亀岡地方まで北摂山地の村々に点々と残っている。今回の地域では忍頂寺地区の小学校で郷土の踊りとして録音テープで児童が運動会に踊ったことがあるが、住民には伝承されていないし、伝承者がいない。しかし、能勢に行けば習うことができるし、昔はそれで踊ったというから、復元の努力をするのもおもしろい。

第２項　労作民謡

山間部であるが、山仕事の唄（「木挽き唄」などの杣唄）は歌ったという記憶がどこにもなかった。

一時、寒天をつくっていて、寒天づくりのいわゆる「寒天屋節」をうっすら聞いたような記憶があるという人がいたが、まったく歌えなかった。寒天づくりの発祥地だった隣接の高槻の原地区などでは「寒天屋唄」が立派に歌いつがれているし、茨木市の山間部でも見山地区では歌える人がいるが、この地域では記憶をする人がいないのは、少し不自然である。したがって、今後の調査で、聞き覚えの人があらわれる可能性はある。丹波地方から出稼ぎにくる寒天屋の作業員がうたった各種工程の唄は、基本が丹波地方の桑もぎ唄を変形させたもので、過去には養蚕もおこなったはずの地域なので、どこかに記憶する人がいるはずである。奥の丹波地域にはハタ織りの歌が残っているが、この地域では各戸が自家消費用に織った程度なのか歌はきかれなかった。

1．子守り唄

子守り仕事は、年長の子どもが従事させられた仕事で、この唄を「わらべ唄」に含めることもできる。しかし、子どもだけではなく、傭われた大人が子守り労働に従事したり、母親や老婆が子守りをして歌った歌詞が多く、ここでは大人の労作唄として扱う。

この地域でも、参会者のほとんどが、今は歌わないが記憶していると語った。また、調査者が誘導的にうたうと唱和する老夫人が多かった。それは特定する必要がなく、ほとんど老夫人が歌えるものであることを示している。

「天満の市よ」系統と「コイコイ節」系統

大阪の代表的な子守り唄「天満の市よ」の系統が全地域で残り、特定の人物ではなく老夫人を数名集めて誘いかけると、ほとんどの人がかすかな声で唱和する。しかし、長い間歌わなかったから、突然に歌うと曲調に狂いがでてくる。一個人でもなんども歌うと、歌うごとに調子が違った。その記憶が薄らいでいるからで、地域独自の歌い方と判断することはできない。

「天満の市よ」は子守り唄のなかで「寝かせ唄」であり、「コイコイ節」もそのバリエイションである。これは曲の終わりに「コイコイ」と付けたことから名付けられていて、これも北摂各地の村々でひろく歌われたものである。

※「コイコイ」の語源は、赤ん坊に対するあやしことばであるが、「シー　コイコイ」と放尿を促す言葉だという説もある。「コイコイ」と付けたして、赤ん坊のおいどをたたくのは、なかなか寝てくれないときであって、寝つきだすと「コイコイ」と付けたしてうたわなかった。

歌詞

（「天満の市よ」でも「コイコイ節」でも共通した歌詞を歌っている。）

ねんね　いーち　天満の市で　　ダイコ（大根）おろして　舟につむ
舟につんだら　どこまでいきゃる　　木津や難波の　橋のした
橋の下には　かもめがいよる（いやる）　　かもめとりたや　網ほしや

（以上はしりとり唄）

ねんね　しなされ　ねた子はかわい　　おきて泣く子は　つらにくい
ねんね　した子に　赤いべべ着せて　　おきて泣く子に　紙のべべ
ねたか　ねなんだか　枕にとえば　　枕ものゆた　寝たとゆた
ねんね　ねんねと　おいどをたたくよ　　なじょ（なぜ）にねましょぞ　たたかれて
うちのこの子は　よい子やさかい　　誰も　やかまし　ゆてくれな
今朝の寒さに　親なら子なら　　ゆくな　もどれと　ゆてくりょに

わしは花嫁　いんだり　きたり　　こぼす涙は　道の露
ねんね　ねんねと　やかましけれど　　これも　守り子の　役じゃもの
あの子憎らし　わしみて　笑う　　わしも見てやろ　わろてやろ
いじの悪いやつ　顔みりゃわかる　　口は三角　目は四角
あの子　えらそに　白足袋はいて　　耳のうしろに　垢ためて
丹波でるときゃ　涙でققが　　いまは丹波の　風もいや（寒天屋唄より）
ねたら念仏　おきたら地獄　　つらいつとめを　せにゃならぬ
つらいつとめを　わたしにさして　　ねてる　おまいさんは　甲斐性なし
甲斐性なしめが　つれてでよ　でよと　　でたら　乞食をさすであろ
腹はヘリ山　これからいんで　　おひつ中山　嵐山
ねんねした子に　さと（砂糖）せん（煎餅）つけて　　のどの奥さんに　そなえたい

2．笑わせ唄

「寝かせ唄」に対して「遊ばせ唄」といわれる部類である。

「去年のややと」は、おんぶした子守りどうしが対になって、背の赤ん坊どうしに「バア」をさせたり、うしろをむきつきあわして「ブウ」といって、なんどもくりかえして、ついに赤ん坊を笑わせる。

この類のものは幾つもあるはずで、今回は二種類だけがふと歌われて、くりかえして聞こうとすると笑って、応じてもらえなかった。

「去年のややと」

去年のややと　今年のややと　　おきいい子は　おっきいし
ちっさい子は　ちっさいし
こっち　むいてごきげんさん
あっち　むいて　ブゥ
こっち　むいて　バア
あっち　むいて　ブゥ
（何度も笑うまでくりかえす。「こっち」を「こっちゃ」ともいう。）

「バア」

かっこー　ばあ（くりかえす）
いないいない　ばあ（くりかえす）

第3項　わらべ唄

1．はねつき唄

正月の羽根つきあそびの唄。

ひとめ　　ふため　　みやこし　　よめご　　いつやの　　むかし
ななやの　　やくし　　ここのつ　　とうお

2．おいどまくり

男の子がそういって、おいどをまくりにきた。昔は着物をきていてズロースもはいていなかったから、いやで、泣いたこともある。

おいどまくり　はやった　　おいどまくり　はやった

3．お手玉（おこんめ）遊び

お手玉遊びは、あずきをもらっていれると音がよかった。そのなかに足袋のコハゼをいれておくとチリンチリンとよい音がした。あずきがもらえないときは、砂をいれてこしらえた。

おひと　おひと　おひと　おひと　おとして　おっさあら
おふた　おふた　おふた　おとして　おっさあら
（以下　おおみ　おおよ　おおいつ　おおむ　おおな　おおや　などといった）
おっきな　橋　こぐれよ（くりかえしてから）　おっさあら　しるしる　ちょい
ちっちゃい　橋　こぐれよ（くりかえしてから）　おっさあら　しるしる　ちょい
おてのせ　おてのせ　かわいかって　おっさあら
おてつみ　おてつみ　かわいかって　おっさあら
おおむね　おおむね　かわいかって　おっさあら
おてそで　おてそで　かわいかって　おっさあら

4．数かぞえ唄

・ひとりふたり　三人よ人　五人六人　七人八人　九（きゅう）人　じゅうにん
・ぼんさんが　へをこいた（十ぺんくりかえして）　百
・一びり　二びり　三びり　四びり　五びり　六びり　びりびりのババたれ

5．手あそび唄

唄にあわせて交互に手のひらをたたきあう。

・せっせせーの　よいよいよーい　　夏もちかづく　八十八夜　野にも山にも　若葉がしげる
（以下学校唱歌）
・あがり目　　さあがり目　　くるっとまわって　ニヤンコの目
（指で目尻をおさえて遊ぶ）

6．縄とびあそび

・大波　小波で　ひっくりかえって　あっぱっぱ
・おはいり　はいよろし　じゃんけんほい　あいこでほい　　まけたおかたはでてちょうだい

7．ゆり遊び

むかいあって、両手をもちあってそれを「ゆりかご」にして、そこへのせて、ゆさぶってあそぶ。

最後にほかす。

・地獄　極楽　えんまさんの　まえで　お経となえて　針の山へとんでいけ

8．けんか唄

安威の子らが、安威川をこえて（現高槻市）塚原の子に喧嘩にいったときの唄

・こーい　こい　塚原こい　この道こい
・みっちゃん　みちみち　ぱぱこいて　かみがないので　手でふいた
（道子のように「ミ」のつく子をいじめる唄）

9．占い

下駄を足でほうりなげて、表がでると天気、裏がでると雨、横向けに立つと雪がふる。

・あした　雨か　ひよりか
・あした　天気になあれ

10．季節の遊び

・節分
としこししゃ　ござった　ことしは　豊年じゃ
・ホーホーほたる来い
・亥の子
亥の子の晩に　重箱ひろて　あけてみれば　ほこほこまんじゅ　にぎってみれば　じゅうべえさんのキンタマ

11．しりとり唄

陸軍の　乃木さんが　凱旋する　すずめ　めじろ　露こく（国）　クロパトキン　キンダマ
まっくろけ　けつのあな　なすび　ぴっくりした高しゃっぽん　ぽんぽん　ぽんやり
（「陸軍の」にもどる）

12．「た」ぬき唄

学校唱歌であるが

・春がき　春がき　どこにいき　山にき　里にき　野にもきイ

さいごに

今次の調査はあくまで一次的な調査にすぎない。というのは、無形文化財の調査では、調査する意図が明瞭でなければ意味をもたないからである。すなわち、調査したものをただ文書的に記録にとどめる

だけではほとんど意味を持たない。どのようにして保存するか、どのように継承ないし発展させるか、その視点を最初から明瞭にもってのぞまなければ、調査そのものが充分に達成できないからである。

このことは無形文化財においては重要なことで、他の多くの地域では調査し、継承し、発展させる努力がいくばくかはおこなわれてきたのであるが、今回の地域はほとんどその努力がおこなわれてこなかった地域だった。したがって、一次的調査では、その存在を確かめることは、ほとんど不可能に近かった。

この地域では、民謡について言えば、充分に接触を常時つづけていけば、歌唱者を育成することができる段階だったが、今回はその余裕がなかった。

ほとんどの場合、調査者の側から「このような歌はありませんでしたか」と、歌って聞かせる努力をくりかえして、そこではじめて「ああ、そんなのがあった気がする」と、どうなりこうなり、あったことが承認されるだけで、「それでは歌ってください」と依頼しても、あまりにも記憶が古くて、すぐに声がでなかった。また、ようやくに歌えても、断片に終わった。

民謡では、それがうたわれていた当時と現在とは生活が変化してしまっていて、日常的にうたわなくなっている場合では、ぼんやり記憶している人々を何度も集めて、そのたびごとに思いだしながら歌ってみて、しかも、思いだして歌うことが楽しみにならなければ、記録できる資料は得がたい。つまり、記録が成功したときはとりもなおさず、ふたたび歌う人を育成できたときなのである。

無形文化財の調査は、この視点をはずすと失敗になる。

今回の場合、多少でも保存ないし継承の可能性をもったものは、わずかに阿為神社の祭礼の太鼓その他宮入りの歌などと、大岩太鼓とだけであった。

他は、ほとんど調査者の側から歌ってみせて「ああ、そんなようなものだった」と承認されたにとどまっている。だが、それでも参会者たちは、楽しかったと帰りぎわには述懐している。

（参会者たちは、その集落で生まれて育って、養子をも断って一生そこで生活した老女たちに限った。他所から嫁にきた婦人は生まれた里の記憶が混入している。男性のほとんどは他所へ仕事に出た経験があるから、記憶が混乱している。）

労作民謡は残念ながら「子守り唄」だけが存在を確かめられた。

多くの片鱗が残っていたものは「わらべ歌」であって、それらもまた、さまざまな子どもの遊びをゆっくりと共同で復元しなければ、片鱗にとどまらざるを得ない。それらは、三島地域に何度も調査してきた調査者が、既に知っているものが現地でも存在したと推測出来る程度である。

以上のため、今回は、ほとんどが、調査者の側から歌ったことで、承認されたものを列記するにとどまる。

再度、機会を得て現地に通って、人々とじっくり接触して、存在を確かめながら、保存継承のめどがつけられることを願っている。じっくりと現地に通うならば、この地域においても、多くの無形文化財を復元することが可能である。

〔安威川流域歌謡採譜資料〕

天満の市よ

A　ねんねころ　い　ーち　てんまのいーち

B　ねんねころ　い　ち　てんまの　ーいちー

A　よ　だいこそ　ろ　え　ーーて　ふ　ね　に　つ　ー　む

B　よ　だいこ　そ　ろ　え　ーて　ふ　ね　にーつ　む

コイコイ節

うとてまわれば　やかましけ　れー　ど　ー

これがもりこの　や　く　じゃ　もの　コイ　コイ

ひとめふため

A ♩ = ♩♪ テンポ自由伸縮

ひとめ　ふ　ため　みやこし　よめご　いつやの

むさ/か し　ななやの　やくし　ここのつ　とウヲ [to-u-wo]

おいどまくり

A

お　いどま　くり　は　やった

一人二人

A〔ゆっくり数えるとき〕

ひ と り ふ た り さ ん に ん よ に ん ご に ん

ろ く に ん ひ ち に ん は ち に ん {きゅうに ん / く に ん} じゅうにん

B〔速く数えるとき〕

ひとり ふたり さんにんよ にん ご にんろくにん ひちにんはちにん きゅうにん じゅうにん

大波小波

〔縄持ち〕

お お な み こ な み お つ ぎ の

〔とぶ子〕

お か た お は い り ハ イ よ ろ し〔縄に入る〕

〔全員で〕

いっ かい に かい さ ん かい 〔縄から出る〕

お 入 り

〔甲〕 〔乙〕

お は い り は い よ ろ し

〔両者〕 勝負が決まらないとき、決まるまで反復

ジ ャ ン ケ ン ホ イ あ い こ で ホ イ

〔勝者〕 D.C.

ま け た お か た は で て ち ょ オ だ い

ア ッ ブ ク チ キ チ キ